

み

ん

な

の

文

芸

# 中田國太郎選

投稿数17首

# 引間豊作選

投稿数24句

**北風座敷わらしの来し音か**

(評) 座敷童子とは旧家に没するとされた子供の妖怪。主に東北地方に伝承されている。通常は五十歳の幼童で、赤ら顔のおかっぱ頭。多くは深夜豪家の奥座敷に現れ、豈の縁や床柱を伝てすたと歩き回り、寝ている人の枕をいじつたりする。胸に乗られるとうなざされることがある。いたずらや祟り、そして化けることはせず、これがいるうちは家運は繁盛しているが、いなくなると傾くという。從て没を家の誇りとして大切に扱い、世間はこれを羨望する。正月早々おいでいただくとほ、おめでたいことである。

凍蝶の風には舞はぬ重さかな

冴えわたる月に思わず手をあわす

下田野 中田 久恵

三沢 鈴木 貞恵

口切の茶席開かむ吾が庵に

金沢 青木富佐子

寺縁に遊ぶ童や花八ツ手

金沢 飯嶋満寿子

下日野沢 高山 ユウ

皆野 大沼シヅ子

登校の靴音高し冬の空

三沢 沢野 恒平

味噌汁に心ぬくもる暮れの朝

古民家の軒をあかして 蔦もみじ

下田野 藤原 道男

皆野 関根 助市

蘭渓の墓につつじの返り花

三沢 真下 杏子

夜祭の神馬嘶く息白し

下田野 竹内 寛

満月や両神山に吸い込まれ

皆野 野口 順子

下日野沢 引間富美子

金崎 山田 雅子

遠き日に夫と遊びし夜祭を偲びつ独り遠花火聞く

皆野 新井 真下

(評) 過ぎ去つて最早とり返すことのできない思い出にすがって生きるのが老人の特徴である。作者は、樂しかった夫との夜祭の日のことを偲び嘆み締めている。その思い出も次第に時の流れと共に遠ざかっていく。その作者の心情が結句の「遠花火聞く」にオーバーラップして効果的に表現されている。この一句によてこの一首は生きている。思い出を詠んだ遠山光栄の歌「栗の花ときどきよく匂ひくる厨にて過去に連想づく」野口作美しい自然描写「月を残して」がいい。新井作、紅バラに人間の幸を想つ着想が斬新。眞下作、親子の熱い心が冬紅葉にめられて美しい。

田畑にはうす霜を置き山肌を朝日が照らす月を残して

皆野 新井 民子

冬ざれの庭に咲きつぐ紅薔薇と今日あることの幸を頬けあふ

皆野 新井 茂子

離れ住む息子夫婦と登り行く三峰参道冬紅葉映ゆ

皆野 新井 貞子

九十と九十三の姉元気我は八十まだ頑張る

皆野 新井 愛子

受験子に親は「頑張れがんばれ」と言ふいとほしくなり婆はなぐさむ

皆野 新井 叶子

深刻なインフルエンザに慈しむ十三人の曾孫案じぬ

皆野 新井 善次郎

新玉の朝を迎えわれ米寿連れ添う妻とダイヤ婚の幸

皆野 千代 弘延

鶴がすました顔で柿つつき頭ぶりては吾を伺う

皆野 下日野沢 浅見

陽に干せる形見のセーター着てみれば妬の温み伝はりてくる

皆野 下日野沢 塩田

遠き日に理髪店終へ帰り道月の光に夜道明るき

皆野 横田 ハルジ

風呂上り着替は炬燼に気付孫二重の温もり、心暖む

皆野 三沢 新井

辰巳向ひ夫の残した陰居家で小春日和に安らぎて居り

三沢 新井 民子

**紗雪ちゃん**



**綺音ちゃん**



1歳になる  
赤ちゃんを  
募集しています

ご応募いただいた赤ちゃんは、全員掲載します。誕生月の前月10日までに総務課窓口(写真をご持参ください)または、町ホームページからお申し込みください。  
問合せ 総務課企画政策担当 ☎62-1230 内線204

原区 小久保和幸さん  
圭さん  
みんなを笑顔にしてくれる  
あーちゃん♡  
ステキな女の子になってね♡

腰区 萩原 俊和さん  
絵里さん  
わんぱくさゆちゃん♡  
のびのび育ってね！！